



阿部彩氏



酒井正氏



村上陽一郎氏



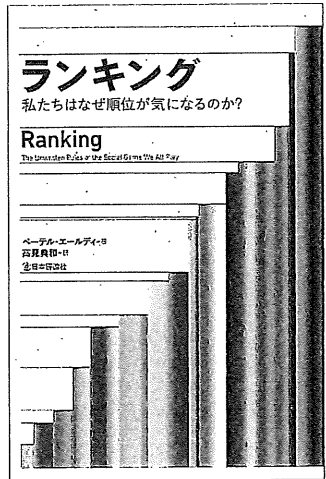
遠藤典子氏

定される5年には、原発の新増設と延長運転をしないと、原子力は電源構成全体の2%しかカバーできないことを、遠藤氏は示す。原発をタブー視せず、現実的な気候変動政策の論議を進めるよう求めている。

この一冊

ランキングは比較に始まる。現代人は常に自分と他人、他人と他人を比較している。どちらがより強くて優れているのかを決めてくれるランキングに、人々は自然と目を向ける。「リストティカル」(「〇〇ベストテン」のようなリスト形式のアーティクル)がメディアの定番記事になるという成り行きだ。ただし、である。本当の意味でのランキングは次の3つの条件を満たしていなければならぬ。すべての項目の中から任意の2つを取り出したときにその優劣が常に決まるという「完全

ペーテル・エールディ著



原題=RANKING (高見典和訳、日本評論社・2700円)
▼著者はカラマズー大学複雑系研究センター教授。専門は計算論的神経科学、計算社会科学。

「順位付け」の理論を総動員

性」、2つのものが同等ではないという「非対称性」、AがBより上位にあり、BがCより上位にあるなら、AはCよりも常に上位でなくてはならないという「推移性」だ。世界最大の湖

のような例は別にして、現実のランキングの多くはこれらの条件を満たしていない。主観的基準が介入する。そこに上位を獲得するための操作の余地が出てくる。世に溢れるランキングと

「最大化」と「十分良い」で満足する「サティスファイス」——満足(サティスファイ)と十分(サファイイス)をかけた言葉——この2つの行動原理を比較すると、後者の方がむしろ幸

どつつき合つか、受け手の見識が問題になる。そこで、本書はランキングという社会的ゲームのルールに焦点を当てる。上述したようなランキングの前提となる論理はもちろん、人間の行動や認知について、社会心理学、政治学、計算機科学、行動経済学などの知見を総動員した議論を展開している。例えば、「限定合理性」の理論。常に最高の選択を追い求め

本書で紹介される多種多様な理論の中でも、この限定合理性についての議論がいちばん面白かった。次点は社会的選択における「不可能性定理」。その次が質的相違と量的相違の関係を論じた「比較可能性基準」。もちろん、評者の主観的基準によるランキングである。

《評》経営学者 楠木 建